The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「まだ～ない」と「まだ～ていない」について : 動詞の意味構造の観点から
Author(s)	山川, 太
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 129-146
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

「まだ～ない」と「まだ～ていない」について
――動詞の意味構造の観点から――

山川　太

1. はじめに

本稿では、「もう～たか？」に対する否定の返答形式としての二種類の表現（「まだ～ない」と「まだ～ていない」）について考察する。

（1）に見られるように、一般的に、「もう～たか？」という問いに対しては、「まだ～ていない」という形を用いるのが通例であるとされている（城田（1998: 33））。しかし、これは、あくまで「まだ～ていない」の汎用性を述べたものであって、（2）のように「まだ～ない」、「まだ～ていない」の双方が使用可能である場合も存在している（寺村（1984）、庵ほか（2000）、ジョンソン（2001）など）。

（1）a. もうチョムスキーの新しい論文、読みましたか？
　　b. * いいえ、まだ読みません。
　　c. いいえ、まだ読んでいません。

（2）a. もう立候補者は決まりましたか？
　　b. いいえ、まだ決まりません。
　　c. いいえ、まだ決まっていません。

本稿の目的は、「まだ～ない」、「まだ～ていない」という二つの表現形式の適格性について、動詞の意味構造（語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure: LCS））の観点から明示的な説明を与えることである。

本稿の内容は、大まかに以下のようになる。

I　「まだ～ない」の適格性には、従来指摘されてきたような動詞の“意志性”の有無というより、むしろ“状態変化”という意味特徴が関わっていること

を指摘する。さらに、この指摘をふまえて、「まだ～ない」の適格性を語彙概念構造の観点から説明する。

II 「まだ～ていない」には、二つの異なった意味（解釈）があると主張し、この意味の違いは、語彙概念構造における意味述語（semantic predicate）の焦点化によって生じていると分析する。

III I・IIの分析から、動詞の意味特徴の影響は、「まだ～ない」においては“可否”という形で、「まだ～ていない」においては“意味の違い”として顕在化していると結論づける。

2.「もう」と「まだ」の機能

「もう～たか？」や「まだ～ない」、「まだ～ていない」の形式に含まれる副詞「もう」、「まだ」の詳細に関しては、林（1999）や池田（1999）などの考察があるが、動詞の意味構造の側面に注目する本稿での分析にはあまり関与的ではないので、ここでは、林（1999: 242）において提出された以下の規定を、「もう」と「まだ」の機能として採用するにとどめておく。

(3) a.「もう」: それを含む文で表される恒常的事象がその文の視点時以前には成立していなかったことを前提とする

b.「まだ」: それを含む文で表される恒常的事象がその文の視点時以前には成立していたことを前提とする

(4) a. もうやめる。

b. もうやめるの？

c. もうやめるというわけではない。

d. まだ続ける。

e. まだ続けるの？

f. まだ続けるというわけではない。

（林（1999: 242））

(3) の規定通り、(4a–c) での「もう」は、一貫して、今までは“やめはしなかった”ことを示唆し、(4d–f) の「まだ」は、一貫して、今までも“続けていた”ことを示唆している。(1a) では、今までは“チョムスキーの新しい論文を読ま

なかった”ことが示唆されていることになるし、（1c）では、今までも“チョムスキーの新しい論文を読んでいなかった”ことが示唆されている。

さらに、ジョンソン（2001: 113）は、（5a, b）による伝達内容の差異に注目し、否定形述語と共起した場合の「まだ」の機能として、“近い将来における変化の到来を暗示している”という事実を挙げている。

（5）a. 本田さんは、来ません。

b. 本田さんは、まだ来ません。

（ジョンソン（2001: 113））

（5a）では、主語の到着の可能性が否定されているだけであるのに対して、（5b）では、実際の発話時には到着はしていないものの、到着という状況がいずれ現実化することを伝達している、というのがジョンソン（2001）の指摘である。本稿では、この「まだ」の機能についても受け入れておくことにする。

3. 語彙概念構造

本研究では、動詞の意味構造について詳しく考えるために、語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure: LCS）を用いる。

語彙概念構造とは、各動詞語彙の意味概念を語彙分解（lexical decomposition）の手法で表示したものであり、原始的な意味述語（semantic predicate）と変項（variable）から成り立っている。変項とは、いわゆる統語論における項（argument）を表す。

（6）a. 状態（state）：[STATE y BE AT z]（「ある」、「いる」など）

b. 活動（activity）：[EVENT x ACT (ON y)]

（「笑う」、「歩く」、「読む」、「蹴る」など）

c. 到達（achievement）：[EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]

（「壊れる」、「曲がる」など）

d. 達成（accomplishment）：[EVENT x ACT (ON y)] CONTROL [EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]　（「壊す」、「作る」など）

ACT や BECOME が意味述語であり、x や y が変項を表している。かかる LCS の表示については、理論の枠組みによってヴァリエーションがあるが（実際、

Jackendoff（1990）と Rappaport and Levin（1988）とではかなり異なっている）、ここでは影山（1996）にならって、上の（6）のような表示を採用する。

以下では、この語彙概念構造を用いて、「まだ～ない」と「まだ～ていない」の適格性について分析していく。

4.「まだ～ない」と動詞の意味特徴

ジョンソン（2001）は、「まだ～ない」および「まだ～ていない」の適格性を動詞の属性と関連づけて考察している。

(7) a. このコンピューター、もうお使いになりましたか。
b. いえ、まだ使って（い）ませんけど…。
c. * いえ、まだ使いませんけど…。

（ジョンソン（2001: 116–117））

(8) a.（毎日 3 キロ歩く人に対して）今日はもう歩いたんですか。
b. いえ、まだ歩いて（い）ません。
c. * いえ、まだ歩きません。

（ibid.: 117）

(9) a. 桜は日本ではもう咲きましたか。
b. まだ咲きません。来月になりそうです。
c. まだ咲いて（い）ません。来月になりそうです。

（ibid.: 117）

上の (7) (8) (9) は、それぞれ「他動詞 (transitives)」、「非能格動詞 (unergatives)」、「非対格動詞（unaccusatives)」を用いた例である[1)]。ジョンソン（2001）は、これらの異なったタイプの動詞ごとに「まだ～ない」、「まだ～ていない」の適格性を観察し、一般的に主語の“意志性”（ジョンソン (2001) では“意志操作 (Protagonist Control)”という用語が使われている）が認められる他動詞と非能格動詞を用いると、「まだ～ない」は不適格になると主張した。また、「まだ～ていない」に関しては、動詞のタイプについての制約は見られず、特に制限なく使用可能であるとし、以下のような一般化を提示した。

(10)

	まだ～ません	まだ～ていません	動詞の例
他動詞	－	＋	使う、書く、作る
非能格動詞	－	＋	泳ぐ、歩く、滑る
非対格動詞	＋	＋	咲く、乾く、届く

（ジョンソン（2001: 123））

では、このような一般化によって、以下のような例はどのように説明され得るであろうか。

(11) a.（赤ちゃんを産んで一年ほど経った知人に、）
　お子さん、もう話されましたか？
　b. いいえ、まだ話さないんです。
　c. いいえ、まだ話して（い）ないんです。

(12) a.（赤ちゃんを産んで一年ほど経った知人に、）
　お子さん、もう（ミルクを卒業して）ご飯お食べになりましたか？
　b. いいえ、まだ食べないんです。
　c. いいえ、まだ食べて（い）ないんです。

「話す」と「食べる」は、普通、それぞれ非能格動詞、他動詞に分類される動詞である。ジョンソン（2001）における（10）の一般化からすると、非能格動詞、他動詞の場合は、「まだ～ない」は不適格になるはずであるが、（11b）、（12b）は共に全く問題のない適格文である。ここで、（11）、（12）における「話す」、「食べる」という動詞の意味をよく考えてみると、いわゆる非能格動詞の「話す」や他動詞の「食べる」とは、つまり“普通の”「話す」、「食べる」とは全く違った意味を有すると考えられる。

(13) a. あの子は2歳になる前に話した。
　b. あなたが立ったのが昨日のことのように思い出される。

（13a）の「話す」が意味しているのは、「（話せない状態から）話す能力を獲得した状態に至ること」であり、（13b）の「立つ」は「（立てない状態から）立つ能力を獲得した状態に至ること」を意味している[2)]。これらの意味は、一種の“状態変化”である。ジョンソン（2001）は、「まだ～ない」が可能なのは非対格動詞の場合であり、主語の意志性の欠如が原因だとしている。影山（1996: 66）では、

状態変化は多くの言語で非対格動詞として描写されるとし、また、同時に“意志的コントロール”が非対格動詞に関与しないことも述べられている。では、“意志的コントロールの欠如＝状態変化”かといえば、そうではない。(6a) からも分かるように、単に“状態（state)”を表す「いる」、「ある」などにも意志性はないとされるので、“意志的コントロールの欠如＝状態”とも言えることになる。結果、“意志的コントロールの欠如＝状態変化・状態”ということになる。

上述のように、ジョンソン（2001）は、「まだ～ない」の適格性において、意志性の欠如を非対格動詞認定の唯一の条件として扱っている。そして、非対格動詞が用いられると、「まだ～ない」は適格になるとしている。しかし、非対格動詞だけでなく、一般的に意志性があるとされる非能格動詞や他動詞も状態変化を含意した場合には「まだ～ない」が可能であることが（11）、（12）、（13）から確認され得るので、本稿では“状態変化”という意味特徴の存在が「まだ～ない」の適格性に関わると主張する。

（14）を見てみる。ジョンソン（2001）に従うと、「いる」という状態動詞（意味構造は（6a））の場合、意志性がないので非対格動詞となり、(14b) のように「まだ～ない」の適格性は保たれるものの、果たして、（14b）の「まだ～ない」は、意志性の欠如ゆえに適格なのであろうか。状態変化という意味特徴が「まだ～ない」の適格性に関わるとする本稿での主張からすると、むしろ、(14) での「いる」が「(ゴキブリの）不在から存在への変化」という状態変化を意味するから、適格であることになる。

（14）a.（新築の家に）もうゴキブリいました？

b. いいえ、（幸い）まだいません。

以下の（15b, c）の例は、「まだ」や「もう」と共起しなくても、「いる」が状態変化という意味を含意し得ることを示している。

（15）a. 太郎は二時間学校にいた。

b.（太郎が）二時間で学校にいることは不可能だ。

c. 一ヶ月でゴキブリがいる家なんて設計ミスだろう。

（16）a. [太郎 BE AT 学校]　　*b. ϕ[太郎 BE AT 学校]

↑　　↑

二時間　　二時間で

c. [EVENT BECOME [STATE 太郎 BE AT 学校]]

↑

二時間で

（16a, b, c）は、それぞれ（15a, b, c）における修飾関係を示している。適格文である（15a）については、（16a）にあるように（6a）と同様の LCS を仮定すれば「二時間」による修飾関係は説明できる。しかし、（15b, c）に対しては、（6a）のような LCS を設定するかぎり説明不可能であり（（16b））、（16c）のような LCS を仮定する必要がある[3)]。このように、一般的には状態を表すような動詞も状態変化という意味を持ち得ることがあるのである[4)]。レキシコンにエントリーされている語彙自体の意味としては、状態変化を表さない動詞であっても、対応する文脈の状況において、状態変化が含意されるものがあるということは、（11）、（12）、（13）における状況と同様である。（11）の「話す」などについて、非能格・非対格双方の「話す」を認めるという考えもあり得るかもしれないが、言語習得の上で大変な負担となってしまうし、直感に反すると思われる。

以上の分析から、少なくとも「まだ～ない」の適格性に関する限りにおいて、“（意志性の有無のみに依拠して規定される）非対格動詞が用いられると適格になる”という一般化は適当ではないと言える。なぜなら、（11）や（12）の「話す」「食べる」を非対格動詞として扱わねばならないからである。岸本（2000）では、非対格性の決定には、意志性と完結性（telicity）（岸本（2000）での完結性は、本稿での状態変化という意味特徴にほぼ相当すると思われる）の両方が関与しているとする必要があるとしながらも、「自動詞に意志性を表す意味があれば、その自動詞は、完結性の如何に関わらず、非能格動詞に分類される（岸本（2000: 91））」と述べている。この岸本（2000）の考えとジョンソン（2001）での分析とを合わせれば、（11）や（12）での「話す」、「食べる」は「まだ～ない」形式で用いることができるため非対格動詞であることになり、これらの動詞には意志性がないことになる。しかしながら、（11）や（12）での「話す」、「食べる」には

全く意志性がないのかと言えば、かなりのたじろぎを感じざるをえない[5]。さらに、意図的な動作と見なせる「起きる」や「走る」も岸本（2000）に従えば非能格動詞であることになる一方で、（17）や（18）に見られるように「まだ～ない」が可能であるゆえにジョンソン（2001）の分析内では非対格動詞であるということになってしまう。さらには、（19）の「（印籠を）出す」のような他動詞についても、他動詞でありながら非対格動詞であることになり、また意志性のない行為であるということになってしまう。

（17）a. もう子供たちは起きましたか？
　　b. いいえ、まだ起きません。
　　c. いいえ、まだ起きていません。

（18）a.（イチローの年間30盗塁の記録がかかった試合を見ている息子に）
　　もうイチローは走った？
　　b. いや、まだ走らないよ。
　　c. いや、まだ走って（い）ないよ。

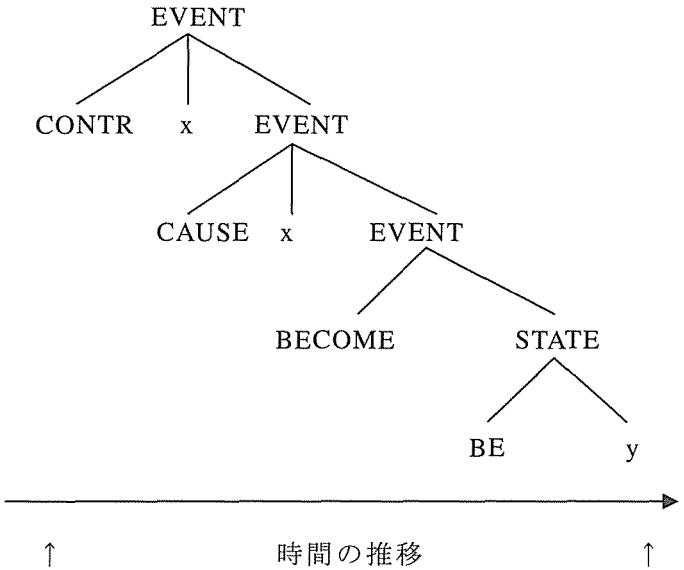
（19）a.（「水戸黄門」を見ている父親に）
　　もう格さんは印籠出した？
　　b. いや、まだ出さないよ。
　　c. いや、まだ出して（い）ないよ。

本稿では、どのような動詞であっても状態変化の意味が読み取れれば「まだ～ない」形式が可能となる、と主張したい[6]。あえて非対格動詞というラベルを用いるならば、「まだ～ない」形式の可否に関する限り、動詞に状態変化の意味が読み取れれば非対格動詞として機能する、ということになろうか。あるいは、そのような動詞は非対格性が高い、とも言うことができるかもしれない[7]。

では、ここまでの分析をふまえて、以下では、（9b）タイプの適格性、（8c）タイプの不適格性をLCSの観点から説明する。

金水（1994）は、語彙概念構造は意味の階層関係だけでなく、時間的な局面の推移をも表すとしている。そして、時制の「た」が動詞に付加された場合、事態は既に最終局面に達していることを意味し、表現者の注意は、結果の状態位置（一番下のSTATE）に集まりやすいと述べている。

(20)



（金水（1994: 46））

この金水（1994）の考えに従えば、(21a) の「もう～たか？」という問いは、(22) の STATE の状態を問うていると言える。

(21) a. もう氷、溶けましたか？

b. いいえ、まだ溶けません。

(22) [EVENT BECOME [STATE 氷 BE MELTED]]

では、なぜ「まだ～ない」が STATE の状態に関する返答になり得るかについては、本稿では次のような説明を提示しておく。(21b) の「まだ～ない」においては、状態変化を表し、瞬間相を持つ「ナル型」の BECOME（影山（1996））が否定されるので、「STATE の状態へ“変化しない”」ゆえに「“変化以前の” STATE（状態）である」、結果「NOT MELTED という STATE（状態）である」という解釈上の計算が行われるのである。一方、「壊す」や「殺す」のような一般的な他動詞などは、ACT 述語が否定されるので、意志未来という解釈が第一義的に生じてしまい、STATE の状態に関する返答になり得ない（日高（1995））。

同様に、(23a) は (24a) における一番下の STATE の状態を問うていることになり、ゆえに、(23c) は不適格になるが、(23d) の方は (23c) に比して適格性が高くなる。

(23) a. もう洗濯物、乾かしましたか？

b. いいえ、まだ乾かしていません。

c. * いいえ、まだ乾かさないんです。

d. ？いいえ、まだ乾かないんです。

(24) a.「乾かす」: [[EVENT x ACT (ON) y] CONTROL [EVENT BECOME [STATE y BE DRIED]]

b.「乾く」: [EVENT BECOME [STATE y BE DRIED]]

5.「まだ～ていない」の解釈類型

「まだ～ていない」の「～ていない」の部分は、「～ている」の否定形であるが、「もう～たか？」の肯定の返答形式には「～ている」が現れ得る。

(25) a. もう課題図書、読みましたか？

b. はい、（もう）読みました。

c. はい、（もう）読んでいます。

(26) a. もう花、咲いた？

b. うん、（もう）咲いたよ。

c. うん、（もう）咲いているよ。

本稿で分析する「～ていない」は、「もう～たか？」に対する否定の返答形式であって、(25c)、(26c) のような肯定の返答形式「～ている」の否定形であると捉えるのが自然であると思われる。

従来、「～ている」には、様々な意味が認められてきた。三原（1997）は、「～ている」が有する意味の統括用語として“持続”を採用し、(27) のような四種の持続類型を立てている。

(27) ①動作持続

a. 太郎が本を読んでいる。

b. 太郎が走っている。

②結果持続

c. 電灯が消えている。

d. 花瓶が割れている。

③状態持続

e. 太郎が進学問題で悩んでいる。

f. 僕は就職のことを考えている。

④効力持続

g. 彼は1年前に渡米している。

h. 僕は昨年試験を受けている。

さらに、三原（1997）は、（27①－③）の三つの類型が、一定のタイプの動詞を要求するのに対し、（27④）では動詞のタイプが特に選ばれないことを観察している。

では、「もう～たか？」に対する「～ている」には、どの類型が当てはまるのであろうか。動作持続は、意味的に明らかに排除されるであろうし、状態持続に関しては非常に語彙的に限られた動詞類を要求するので除外しておく。すると、結果持続と効力持続が残ることになる。三原（1997）では、効力持続解釈の「～ている」は、過去の副詞と自由に共起する一方で、現在を表す副詞が使われると動作持続にしか解釈されないとしている。また、結果持続は「今」を示す副詞とは共起するが、過去を表す副詞とは共起できないとされる。これらのことから、（25c）は“効力持続”、（26c）は“結果持続”と解釈されると言える。本稿では「～ている」の否定形「～ていない」も同様の類型を有していると仮定し、「～ていない」の意味は二つに分化し得ると主張する。

松田（2002: 39）は、「イタリアには一度も行っていない」が「イッタという効力が今、持続していない」とは解釈しづらく、また「イカナカッタという効力が今、持続している」と考えるのもおかしいことを述べ、「～ていない」の基本的意味に対して、「効力」という概念の代わりに、以下のような規定を行った[8]。

（28）　〈過去時ニ／今マデニ〉　〈発話時判断〉

シテイル・シテアル＝何々シタ　という事実（結果）が　アル

シテイナイ　＝何々シタ　という事実（結果）が　ナイ

（松田（2002: 38））

このように、松田（2002）は「〜ている」と「〜ていない」には「発話時判断」の相違があると考えているわけであり、本稿のように「〜ている」における意味類型をそのまま「〜ていない」にスライドさせることは、松田（2002）の分析からすると不適切なことであるが、本稿での議論において重要なのは、あくまで「〜ていない」が単一ではなく、二つの意味を持つということである。

では、“効力持続”、“結果持続”という二つの解釈が生じる理由をLCSの観点から考えてみる。この点については、松村（1999）が「〜ている」がインパーフェクティブ・アスペクトの機能をもっているとし、（29b）のような“結果持続”の解釈は、（30b）におけるように、[BE AT]、つまり結果状態であるSTATEの部分が焦点化（網掛け部分）されることにより生じるとしている[9]。また、いわゆる進行形（三原（1997）では“動作持続”）を表す（29a）に関しては（30a）におけるような焦点化が起こるとされる。

（29）a. 花子は、今、池に張った氷を割っている。

b.（今、目の前で）窓ガラスが割れている。

（松村（1999: 195））

（30）a. [EVENT 花子 ACT ON 氷] CONTROL [EVENT 氷 BECOME [STATE 氷 BE BROKEN]]

b. [EVENT 窓ガラス BECOME [STATE 窓ガラス BE BROKEN]]

（松村（1999: 195））

本稿では、松村（1999）にならい、意味解釈の違いを、LCSにおける意味述語の焦点化に求める。結果持続の意味の場合、動詞は（6c）のような状態変化を意味する動詞が用いられるが、松村（1999）で主張されるように、意味述語BEを含むSTATE範疇に焦点が当てられ、結果持続の意が生まれてくると考える。一方、（6b）では、STATE範疇は存在しないし、（6d）では、より際だったACT述語があるので、BEを含むSTATE範疇が焦点化され得ないと本稿では分析される。効力持続に真に焦点化が関わるのかどうかについては、考えが分かれるところであろうが、ここでは、少なくとも“結果持続”はLCSにおける意味述語（意味範疇）の焦点化によって生じ、この焦点化が阻まれた時、“効力持続”の解釈が発生すると考えておきたい。

(31) a.（TVの前の子供に、）もう仮面ライダーは変身した？

b. ううん、まだ変身して（い）ないよ。

(31b) の「変身して（い）ないよ」は、“結果状態”か“効力持続”かで読みが競合する場合がある。本稿では、「変身する」が“状態変化”を表す動詞として用いられるならば、焦点化によって“結果状態”が意味されることになる。他方、「変身する」が「男性主人公が必要に応じて為せる変身行為」と見なされるならば、LCSにはACTが含まれることになり、結果、BEを含むSTATE範疇の焦点化が阻まれることになり、結果状態の解釈はなくなって、“効力持続”の意味になる。これら二つの解釈の場合のLCSを以下に示しておく[10]。

(32) “結果状態”

[EVENT BECOME [STATE 主人公（変身前）BE 仮面ライダー（変身後）]]

(33) “効力持続”

[EVENT 主人公（変身前）ACT] CONTROL [EVENT BECOME [STATE 主人公（変身前）BE 仮面ライダー（変身後）]]

（BEを含むSTATE範疇の焦点化×）

このような、動詞の捉え方の差異は、先に見た「まだ～ない」においては、適格か不適格かという形で表面化する。つまり、(34b) が適格である場合には「変身する」はあくまで“状態変化”を表す動詞であることになる。

(34) a.（TVの前の子供に、）もう仮面ライダーは変身した？

b. ううん、まだ変身しないよ。

6. おわりに

本稿で主張したことを以下にまとめる。

I 「まだ～ない」の適格性には、動詞の“意志性”の有無というより、むしろ“状態変化”という意味特徴が関わっている。また、レキシコンでの語彙自体の意味としては状態変化を表さない動詞であっても、文脈等に依存して状態変化が含意される場合がある。「まだ～ない」の適格性は、LCSにおけるBECOMEの有無から行われる解釈上の計算によって決定される。

II 「まだ～ていない」には、二つの異なった意味（解釈）がある。この意味の

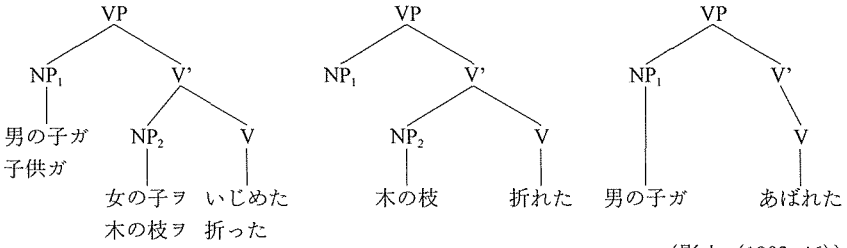
違いは、LCS で焦点化が起こり得るか得ないかによって生じている、と分析される。

Ⅲ　Ⅰ・Ⅱでの分析結果から、動詞の意味特徴の影響は、「まだ～ない」においては“可否”という形で、「まだ～ていない」においては“意味の違い”として顕在化していると言える。

註

1）自動詞には「非対格動詞」、「非能格動詞」の区別があり、大まかには、意図的に動作を行う動作主（Agent）を主語に取る自動詞が非能格であり、人間の意志的作用が関わらない、自然発生的ないし自発的な出来事を表す自動詞が非対格であると言える（影山（1993）、影山・由本（1997）など）。また、このような意味的な違いが統語構造（syntax）にも反映されるとする考えは「非対格性の仮説（Unaccusative Hypothesis）」と呼ばれる。この仮説の下では、他動詞、非対格動詞、非能格動詞の統語構造は以下のようになり、非能格動詞の主語が基底レベル（D 構造）においても主語であるのに対し、非対格動詞の主語は基底では直接目的語として生成されることになる。

(a) 他動詞　　(b) 非対格動詞　　(c) 非能格動詞



（影山（1993: 46））

2）Tsujimura（1999）も以下の例から、(d) の「歩く」と (e) の「歩く」とでは telicity に関して解釈が異なるとしている。

(d) ＊歩きかけの人

(e) 歩きかけの赤ちゃんには気をつけてください。

Kishimoto（1996）での議論では、(d) (e) のような「V かけの N」という形式は、自動詞では非対格動詞の場合に可能であって、非能格動詞を使うと不適格になるとされ、非対格動詞は非意図的事象を表す動詞であるとされている。Tsujimura

（1999）はその反例として、(d)（e）の例を挙げて、双方意志性のある行為である、つまり非能格動詞であるにも関わらず、適格性に差があるのは（d）の方の「歩く」が非完結的（atelic）であるのに対し、(e）の「歩く」は完結的（telic）であるためであると説明する。ゆえに、意味的に意志性があっても、完結的（telic）であれば「V かけの N」は適格となり、非能格動詞と非対格動詞とを区別する要因は意志性の有無ではなく、telicity にあると主張する。本稿での結論を先取りして述べることになるが、Tsujimura（1999）での telicity を状態変化と読み替えるならば、本稿での主張は Tsujimura (1999) と本質的に同様であり、異なった素材（言語現象）を用いて Tsujimura（1999）の論を強化したことにもなる。

3）BECOME という変化を表すのは「～時間で」といった時間枠の限定表現であり、他方、BE という状態を表すのは「～時間」という継続時間表現である（影山 (1996: 57)）。

4）曽我（2004）も、一定の条件が整えば“変化”の概念が状態動詞にも関わり得ることを示唆している。

5）注 2）でも見たように、Tsujimura (1999) も“赤ちゃん”の「歩く」行為を意志性のある行為であると見なしている。

6）(19）の「(印籠を）出す」は「格さん」の状態変化（身分を伏せた状態から身分を明らかにするという変化）を表すとも解釈できるし、また、ドラマ（ストーリー）の流れ自体の状態変化（クライマックスシーンへの状態変化）であるとも捉えることができる。

7）このような捉え方は、小野（2005: 157）での「非対格性が特定の動詞の語彙的な意味として本来的に備わったものではなく、動詞事象の起動に関わる話者の解釈として現れる特性と考える」という見方と相通ずる部分があると思われる。

8）松田（2002）で言及されている「効力」の概念は工藤（1989）のものである。

9）松村（1999: 189）によれば、パーフェクティブ・アスペクト（perfective aspect）が、ある出来事や状況をひとつのまとまりとして捉え、その出来事や状況を構成している内部の相には言及しない表現の仕方であるのに対し、インパーフェクティブ・アスペクト（imperfective aspect）を使えば、内部の相に言及可能であるとされる。

10）(33）の LCS 表記について付言しておく。この LCS は (6d) を元にした表記となっているが、項の数が異なっている。(33）では x=y となっており、いわゆる再帰的な意味構造を成している。

参考文献

林登美子（1999）「『もう』と『まだ』の意味―文副詞としての役割―」『言語学と日本語教育』くろしお出版

日高水穂（1995）「『マダ～シナイ』と『マダ～シテイナイ』」『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版

池田英喜（1999）「『もう』と『まだ』―状態の移行を前提とする２つの副詞―」『阪大日本語研究』11

庵　功雄ほか（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press.

ジョンソン由紀（2001）「『まだ～ない』文における意志操作の役割―他動詞、非能格動詞、非対格動詞の一考察―」『言語学と日本語教育Ⅱ』くろしお出版

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版

影山太郎・由本陽子（1997）『日英比較選書７語形成と概念構造』研究社出版

金水　敏（1994）「連体修飾の『～タ』について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版

Kishimoto, H. (1996) "Split Intransitivity in Japanese and the Unaccusative Hypothesis," *Language* 72, 248–286.

岸本秀樹（2000）「非対格性再考」『日英語の自他の交替』ひつじ書房

工藤真由美（1989）「日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学３』むぎ書房

Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*, MIT Press.

松田文子（2002）「『過去時ニ～シタカ？』に対する否定の返答形式―シテイナイとシナカッタの選択に関して―」『日本語教育』113 号

松村宏美（1999）「概念構造とインパーフェクティブ・アスペクトの焦点化」『人文論究』第 49 巻　第２号

三原健一（1997）「動詞のアスペクト構造」『日英比較選書７ヴォイスとアスペクト』研究社出版

小野尚之（2005）『生成語彙意味論』くろしお出版

Rappaport, M. and B. Levin (1988) "What to Do with θ-roles," in W.Wilkins (ed.) *Thematic Relations*, Academic Press.

城田　俊（1998）『日本語形態論』ひつじ書房

曽我松男（2004）「動詞下位分類と意味特性『変化』」『言語と教育―日本語を対象として―』くろしお出版

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

Tsujimura, N. (1999) “Lexical Semantics,” in N.Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, Blackwell.

付記：本稿は、国語学会（現・日本語学会）2003年度秋季大会（於：信州大学）において口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。発表当日および発表前後の段階で多くの有益なコメントを下さった方々に心から感謝申し上げる。貴重なご意見・ご批判を本稿中で生かしきれていないとすれば、本稿中の不備・誤謬とともに全て筆者の責任である。

〈キーワード〉「まだ～ない」、「まだ～ていない」、語彙概念構造、状態変化、焦点化

On "*mada –nai*" and "*mada –teinai*": A Lexical Semantic Approach

Futoshi YAMAKAWA

There exists two kinds of expressions, "*mada –nai*" and "*mada –teinai*" as the negative answers for the question "*moo –taka?*". In this paper, I consider these expressions with the aim of providing an optimal account for the (un)grammaticality of the two.

It has been argued that "volitionality" of verbs makes "*mada –nai*" ungrammatical(Johnson(2001)); however, I point out that the property which affects the (un)grammaticality is not "volitionality" but "change of state". Additionally, I show that verbs which never denote "change of state" lexically can express such property, depending on contexts. Furthermore, it is argued that grammaticality of "*mada –nai*" can be explained by an interpretational calculation in LCS (Lexical Conceptual Structure).

I show that "*mada –teinai*" has two meanings and such a kind of ambiguity can be ascribed to presence/absence of the operation "focusing" in LCS.

The analysis presented in this paper leads to the claim that "*mada –nai*" manifests the semantic property of verbs in (un)grammaticality and "*mada –teinai*" does so in semantic(or interpretational) differences.